

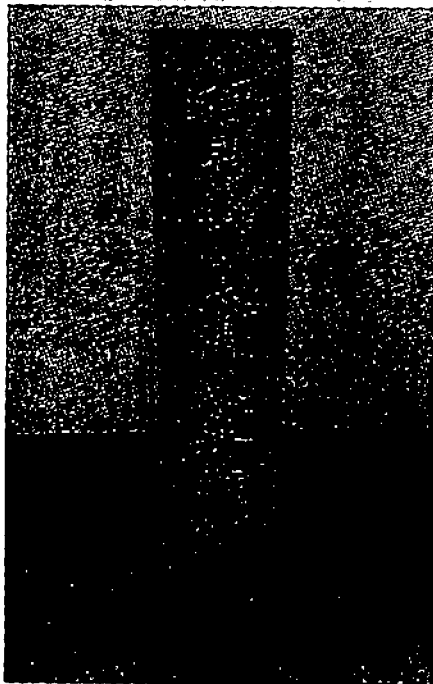
大浦船表番所

大田市五十猛(いそたけ)町「大浦(おおほら)港」(五十猛港)は、現在でも県内有数の良港である。西の韓郷山(からいよま)、東の松島が自ずと防潮堤をなし、さして手を加えずとも船入りの好条件を備える。いわば天の賜り物なのである。石見銀山を差配する代官も代々この港を重要視し、定期的に南向(げん)として検見(げん)を欠かさなかった。この大森・大浦間の代官道を「往還(おうかん)」と呼ぶ。大浦には代官所肝いりの

埋もれたる古道 五十猛-大森

往還を行く ①

三井簿



「船表番所」(林家)屋敷内の一画が設けられ、五十猛郵便局前に石碑が建てられ、往時をしのぶことが出来る(写真)。更に地元の郷土史家である長尾柳作(りゅうさく)氏が間取り絵図を復元されている(図)。

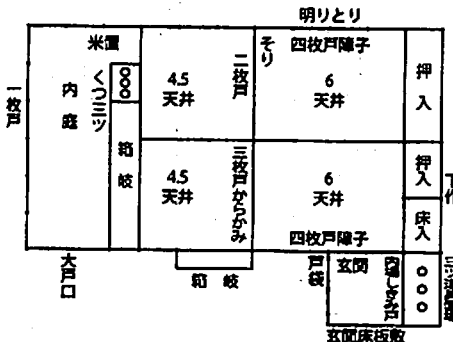
ある「土肥(どひ)屋番所」(林家)屋敷内の一画が設けられて。現在五十猛郵便局前に石碑が建てられ、往時をしのぶことが出来る(写真)。更に地元の郷土史家である長尾柳作(りゅうさく)氏が間取り絵図を復元されている(図)。

「船表番所」(林家)屋敷内の一画が設けられて。現在五十猛郵便局前に石碑が建てられ、往時をしのぶことが出来る(写真)。更に地元の郷土史家である長尾柳作(りゅうさく)氏が間取り絵図を復元されている(図)。

「往還」の存在を再び浮き彫りにした最大の功績者は松原忠晴(ただはる)氏で、現在大田市の静間町に住まわれ、八十を越して御健在であられる。松原氏は「磯竹村露庭(いそたけむつかにわ)観音堂」という自伝を物言している。氏の生家を「柁(ひわ)の木(五十猛町露庭)と言

「代官さんの列が往還を通る時は、われわれ百姓は田の中や道の上で土下座してお迎えた」と、私の祖父(安政三年生まれ、昭和十一年没)は、話していた。(磯竹村露庭 観音堂 三〇四頁) (みづい・あつし) 五十猛歴史研究会会員

(大浦船表番所間取り復元絵図)



長尾柳作発行「ふるさとそたけ」(昭和57年2月11日、第3号)より。佐々木寿恒氏蔵

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おすすめ新書本紹介」◇火曜日には内藤博之さんの「熟年夫婦の初めてのイタリア」

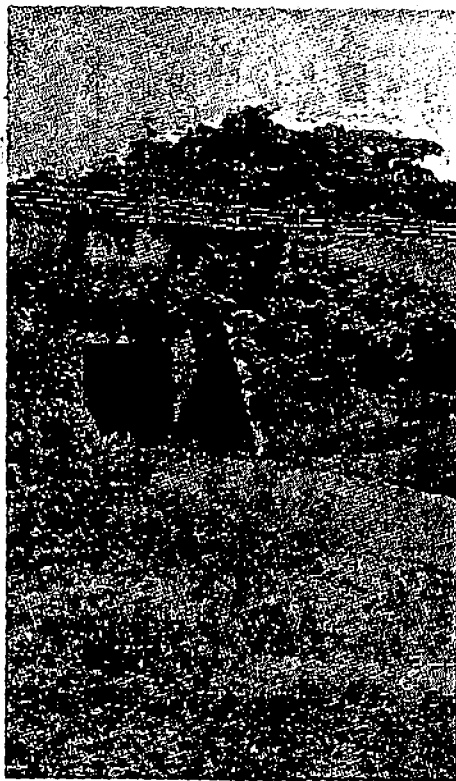
風越

海岸線から一歩も無い、国道9号線大浦西口バス停裏に、小山が構えている。この山越えが、今も昔も、大浦から内部へ通ずる最短路である。山の名を風越(かざし)という。今は舗装が完備されてループ走行も心地よいが、往昔は人も馬も難渋を極めたことだろう。峠を渡ると一面の田園が広がる。ここが畑井(はたい)である。右手奥が丹波(たんばみ)で、大屋町へ結ぶ筋が現在も稼働している。左手報恩寺(ほう

埋もれたる古道 五十猛一大森

往還を行く ②

三井淳



風越=大田市五十猛町

おんじ)前の大た(長尾柳作「五十猛曲(おおまがり) 歴史年表」)。先に堤原(つつんぼら) 鉢山跡の池(たかまるやま)の石碑が見える。昭和十年「高丸山(たかまるやま) 満鉢山が探検を行った」とあり、以後十九年までに約八千五百少を採掘したといふ。戦後黒鉢・石膏の採掘が続けられし(かみかくれ?) となつた。「かみかくれ」として木立ちを抜けると、幹線にぶち当たる。県道久利五十猛停車場線である。丁字路右端に再び石碑があつて、この辺りの坂を唐松坂、あるいは菅善寺坂(とうせんじざか)と呼ぶ。『往還』要所には決まって御影石の石碑が設置されている。ほとんどが松原光雄氏の私費で賄われた。光雄氏は松原忠晴氏の同族である。石碑の上の山を「唐松ヶ曾根(からまつがそね)」という。(みつい・あつし)五十猛歴史研究会(編)

日替わり連載コーナー

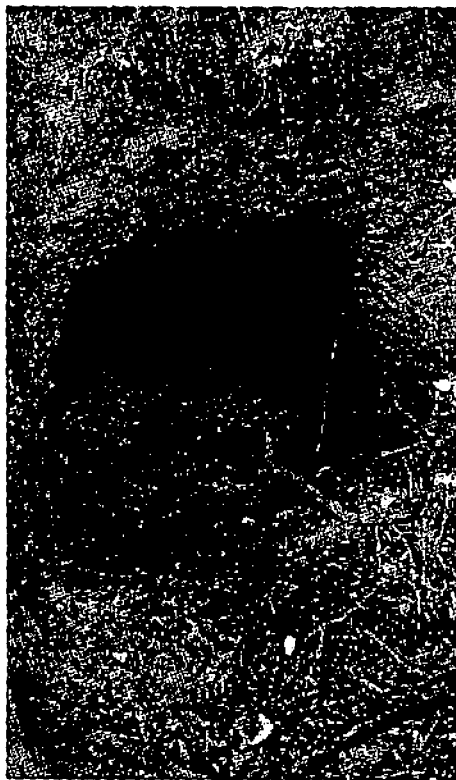
鉛山

鉛山は、慶長年間(一五九六〜一六一五)、林通村(みちむら)によって開かれた。通村は、時の土肥屋当主通行(みちゆき)の弟である。通行の夫人は安原伝兵衛の娘であった。伝兵衛は釜屋間歩(まぶ)の大鉱脈を掘り当てた人物で、大森銀山の最盛をもたらした最大の功績者である。備中人の伝兵衛が毛利の要請により、大森入りしたのが天正(一五七三〜一五九二)中のことである(「安原家累書」)。定かではないが、

埋もれたる古道 五十猛一大森

往還を行く ⑤

三井澤



鉛山坑道口

鉛山も関ヶ原の歴史で鉛山を探訪するは明治期のもの、上部戦い(一六〇〇) こととなった。地蔵さのもの宝層(一七五以前、既に稼働んから、鳴滝の山標を一七六四)にさかしていったものと大きく迂回、絶え間ののぼるものだぞうだ。考えられる。伝兵衛家 ない悪路に息も切れる。長谷川さんの手を借り、土肥屋は、その後も それでも一時間ほどで「宝層坑」の中へ 婚姻を重ねている。通 鉛山の正面に達した。 入る。真っ暗で何も見 村の鉛鉱は大森へ送り せいら、探掘口が二 えないが、ライトを当 れ、大森の灰吹銀を精 力所開けられている。 てると、壁にコソモリ 練するのである。 銀山ガイドの長谷川さ が張り付いている。結 今年二月二十四日、 んによれば、下方の穴 露と汗で早くも全身す ぶぬれとなる。坑道は 恐ろしく狭く、身を屈 めなければ前へ進めな い。側面に接触すれば、 たちどころに泥まみれ となる。坑道は先々延々 と続いていくかのよう、 この辺で止めておいた 方が無難である。

見する。しかし、 我々の如く、は るばる尋ねる者 は、もはやほと んど稀となり、 往時のにぎわい を偲ぶすまがも ない。(みつい・あ つし)五十猛歴 史研究会(会)

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「お 木曜日には内藤博之さんの「熟年

よっさ口

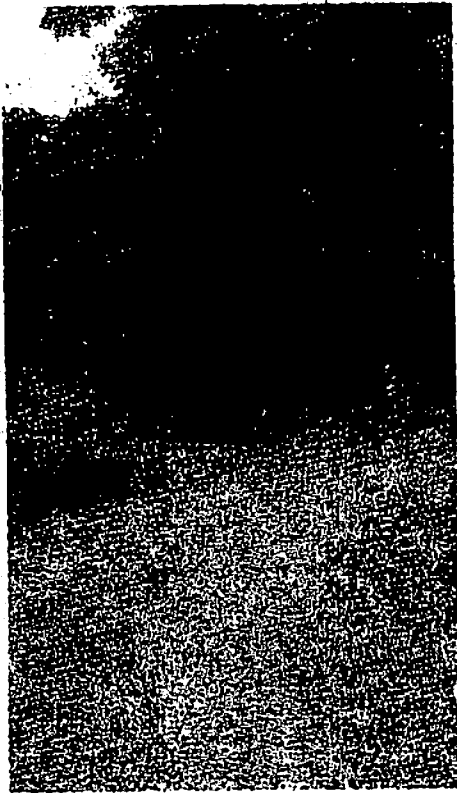
往還の本道に戻る。

鴨滝止の前から細い道が南へ走っている。今では舗装も行き届いていないが、もとは築山土(うまじち)で、田の畔(あぜ)と兼用されていた。この辺りを「地頭所(じごうしょ)」と言ひ、往還道と徳原川の間には延々と田が広がっている。地頭所とは、もっぱら鎌倉幕府御家人(ごけにん)の所領を言ひ、江戸時代でも、いわゆる「お殿さま」領の俗称として用いられたという。古い家柄の多い地域だ

埋もれたる古道 五十猛一大森

往還を行く ⑥

三井澤



よっさ口

ついでに五十猛歴史研究会(会)の

が、いずれが地頭さんに連なるか定かでない。往還道の真ん中に当たることから見て、代官所上役(うわわやく)の別所が起源かもしれない。

(か)にわ(二)に変わって、左の谷へ折れる地点を「よっさ口」という。昨年の往還踏破、美(は)にを起点とした。よっさ口へは車の乗り入れが不可能なので、車は全て唐松ケ曾根に停め置いた。

谷筋は藪の中へと誘い込むよう、全く前途が予見出来ない。しかし往還は、この真んただ中へ踏み込まねばならない。おちまち神祕(は)は(か)られるものがある。

ひょっとして、「神庭(か)にわ(二)の意味でもあったのではないか。紫川町荒神谷遺跡(か)にわ(二)を「神庭(か)にわ(二)と言ひ、「か)にわ(二)「かんば」は音聲上のちよっとした差異に過ぎない。「庭」には「宮田」「役所」の意味もあり、「神庭」は「神のましますところ」となる。口」は、人界を離れて神域へ向かう意味の、「世(か)にわ(二)を「よっさ口」とも言うか。

日替わり連載コーナー

◇月曜日は鳥取県立図書館の「お木曜日は内閣博覧会」の「熱年

観音堂

細江正治(なわえまさはる)氏を先導として、林西部公民館長以下の会員が後に続く。細江氏は大屋町鬼村出身、現在は静間町に住まわれる。かねてから往還道を自在とする、古強者(ふるいぢもの)なのである。歴史会長の永見先生はサボトに回り、今回の終点大屋まちなんに待つ。よき山口以降の往還は、「道」とは言い難い。川沿いの平地が奥に向かつて延々続いているもの、「道」といふ泥まみり、歩けた

埋もれたる古道-五十猛-大森

往還を行く ⑦

三井津



ものではない。溶岩流の名残である。こればかりでなく、岩上に灯籠(とうろう)の碁田(いせだ)が備わる。「観音堂」なのだ。従い、の目印である。脆弱(ぜいじゃく)な突き出し部の先端を土手をひたすら行くと、回って反対側に出ると、登り口があった。ついで、折の上を重ねて更に大岩が滑り出し、度肝(どかん)を抜かせる。これは、がま口を開けている。脆弱(ぜいじゃく)な突き出し部の先端を土手をひたすら行くと、回って反対側に出ると、登り口があった。ついで、折の上を重ねて更に大岩が滑り出し、度肝(どかん)を抜かせる。これは、がま口を開けている。脆弱(ぜいじゃく)な突き出し部の先端を土手をひたすら行くと、回って反対側に出ると、登り口があった。ついで、折の上を重ねて更に大岩が滑り出し、度肝(どかん)を抜かせる。これは、がま口を開けている。

観音堂

この山自体、そもそも鉢山なのであり、観音堂の洞窟も、坑道を利用したものに違いない。(みづい・あつし三十五猛歴史研究会会員)

日替わり連載コーナー

島根日日新聞は島根県立図書館の「おもしろ新報本紹介」コーナー「島根日日新聞」を掲載して、島根日日新聞の魅力を伝える。

鬼村

観音堂で三十分ほど
休息をとると、山を降
りて再び先を行く。松
原忠晴氏の生家「枇杷
の木」は、観音山の東
側、往還よりやや奥に
入ったところにあった。
残念ながら、昭和四十
七年、豪雨のために裏
山が崩壊し、跡形もな
く埋もれたという
(観音堂「序」)。
旧「枇杷の木」の、
往還を挟んで反対側に
石垣の遺構がある。細
江の丸によれば、あれ
が松原一族の先祖川北
氏「棟」屋敷跡だとい
う。その前には「た

埋もれたる古道 五十猛一大森

往還を行く^⑧

三井津



この辺りで代官落馬すと

た「地蔵」が
祀つてあるそ
うだ。この一
帯では、かつ
て「たたら製鉄」が盛
んであったといふ。さ
ながら、足元に「カナ
クン」が転がっている。
川北氏は、「たたら」
の元締でもあった。五
十猛の深奥(しんごう)
は、そのかみ鉱物資源
にあふれていたと思わ
れる。そして往還の要
所はその露田ポイント
と重なり、背後には、
神の影がちらりへの
「五十猛神(イソタケ
セ、代わり)に竹林が面
ルノカミ」に避いな
前(まへ)に立ちどまらる。
竹
を切りながら進まらる
逸話がある(写真)。
坂を登り詰める
と、十字路とな
る。細江さんほ、
直進を指示した。
往還は五十猛を
離れ、大屋町の
鬼村に及んでい
る。

(みつい・あ
つし)五十猛歴
史研究会(会)

日替わり連載「山ノ内」の地蔵

◇月曜日は島根県立図書館の「お
木曜日は内藤博士の「熱年

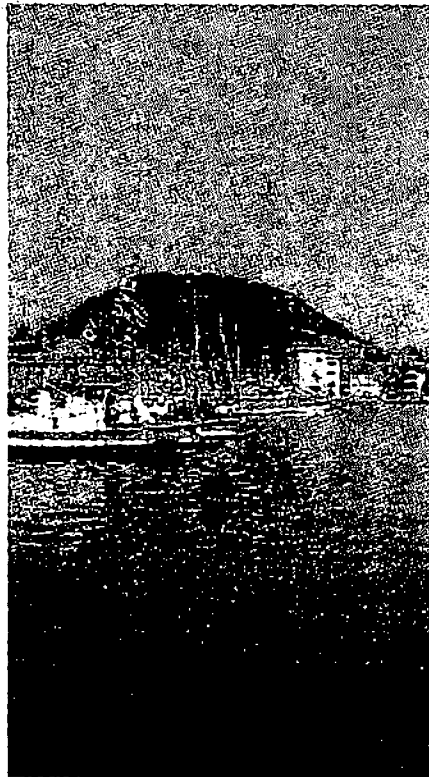
慶長八年のこと

松原忠晴さんが、「往還」の存在を世に唱えた大きな理由のひとつに、慶長八年(一六〇三)の送銀にまつわることがある。征夷大将軍に就いたばかりの徳川家康を言祝(ことほ)ぐべく、大久保長安は安慮兵衛を伴って上洛した。

一方、大森銀山の存在を天下に示す意図から、大森の産銀を、伏見城下に同時同座を期して発送したのである。この時ふた通りの経路を採用、ひとつは大森から陸路中国山地を越

埋もれたる古道 五十猛一大森 往還を行く ⑩完

三井 淳



五十猛町大浦港

え尾道へ出て、う。瀬戸内航路を 迎えるもの。そして今ひとつは、往還を通じて大浦港に陸送、大浦からは北回り海路で若狭湾に入り、琵琶湖を下って伏見に送ったというのである。それぞれに千貫、伏見で合わせて二千貫を計上したとい

大森銀大浦発の確証は、無い。しかし、我々には確信がある。詩人の千里眼は、四百年前の情景を、今まさに目にしている。(みつい・あつし)五十猛歴史研究会会員

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「お木曜日」は内藤博之さんの「熟年